

19世紀前半パリにおけるセルクル

——M・アギュロンによる「ブルジョワ的社交関係」概念の再検討——

長野 壮一

序論

1. セルクル前史——パリ上流社会の社交関係
2. パリにおけるセルクルの構成原理——復古王政期および七月王政期を対象に
3. パリにおけるセルクルの固有な性格——貴族とブルジョワジーの融和

結論

序論

日刊紙『フィガロ』の創刊者として知られるイポリット・ド・ヴィルメサンは晩年、自身の青年時代を回想して、次のように述べている。「1840年頃、英語の *high life* という語句はまだ知られていなかった。ある人がどの社会階級に属しているかを知るには、彼がよい暮らしを送っているかどうかを尋ねる必要はなく、ただ「社交界の方ですか」と言ったものである。「社交界の人」でない者など、存在しないも同然だった。さて、およそパリに住む〔社交界の〕人の日課とは、夕方5時頃トルトーニの前を通ることだった。それから2時間後、所属のセルクルか自宅で夕食を取らない場合は、カフェ・ド・パリの店内で毎日違ったテーブルについたものである¹。

文章の中に登場する「セルクル (*cercle*)」とは、イギリスのクラブ (*club*) 文化に影響を受けて生まれた社交組織を指し、いずれもラテン語の *circus* から派生した語句である。フランスにおいて「クラブ」と言った場合は通常、ジャコバン・クラブのような政治結社を指すため、イギリスから持ち込まれた新奇な社交組織は「セルクル」の名で親しまれたのである。フランス革命の混乱が一応の収束を見ると、セルクルは上流層の男性によって受け入れられ、それまでの中心的な社交形態であったサロンに取って代わる形で、フランス社会に浸透していった。本稿では主に、このセルクルについて考察する。会員同士の平等を原則として純粋な社交に活動の主眼を置くセルクルは、アソシアシオン (*association*) の集合体としての市民社会を社交文化史の観点から考察するのによい事例だと考えられるからである²。

セルクルの研究史は、大きく分けると「19世紀ブルジョワ階級研究」「社交関係研究」「エリート層の社交文化史研究」という三つの動向に整理することができる。

第一の動向は、A・ドマールによって着手された19世紀ブルジョワ階級研究である。E・ラブルスの影響下にあったドマールは、財産・職業・生活様式などの観点からブルジョワ階級の内的構造を計量的に表すことに成功した。人的交流を通じて他地域の住民同士を結び付けることで、ブルジョワ階級という社会集団の形成に寄与した組織としてセルクルに着目したのである。近年では英語圏の歴史家もドマールの研究を批判的に継承しており、例えばC・

¹ De Villemessant, H., *Mémoires d'un journaliste. Souvenirs de jeunesse*, Paris : Dentu, 1884, pp. 277-278. 括弧内は引用者による。

² 市民社会をアソシアシオンの集合体とする見解は次の著作に負っている。De Tocqueville, A., *De la démocratie en Amérique*, dans *Œuvres*, t. 2, Paris : Gallimard, 1992, pp. 620-625; S=L・ホフマン (山本秀行訳) 『市民結社と民主主義 1750-1914』岩波書店、2009年。

E・ハリソンは、フランシュ＝コンテ地域圏を中心とする三都市におけるブルジョワジーの形成を論じている。ハリソンの研究においてセルクルは、余暇の提供を通じてブルジョワ階級の形成を促した文化的要因として位置づけられた³。

第二の動向は、M・アギュロンによって開拓された社交関係研究である。アギュロンは人間社会における集合心性を歴史学的ないし社会学的に描き出そうと試み、社交関係 (sociabilité) を歴史研究における主要テーマの一つとして確立することに成功した⁴。アギュロンは、社交関係の活発さや緊密さを表す指標としてアソシアシオンに着目し、「貴族的社交関係」の表れであるサロンと対比する形で、セルクルを「ブルジョワ的社交関係の典型的な形態」として類型的に把握する。アギュロンの立論において、ブルジョワジーは貴族と民衆に挟まれた中流階級として定義され、会員同士の平等性、家庭外の場、女性や子供の排除、道徳的いかがわしさ、政治化への傾向などがブルジョワ的社交関係の特徴とされた。アギュロンは「サロンからセルクルへ」という社交関係の変化を検討することで、身分制に基づく「旧体制的フランス」から平等主義に基づく近代的な「ブルジョワ的フランス」への移行を捉えようと試みたのである⁵。

これら二つの研究動向において、セルクルの担い手として想定されたのはブルジョワジーであった。ただし「ブルジョワジー」という用語は、この階級を支配階級としてアプリアリに措定するマルクス主義を背景とした分析概念であるため、近年ではこの用語を無批判に使うことは避けられる傾向にある⁶。これに対して、第三の動向であるエリート層の社交文化史研究は、やや趣を異にしている。19世紀前半の社交界を民主化途上の社会における社会構成体として論じたA・マルタン＝フュジェは、セルクルをパリ社交界の構成要素として位置づける。このとき社交界の担い手として想定されたのは、ブルジョワジーではなく「エリート」である。文化的な日常生活史に光をあてることで、貴族とブルジョワジーの相互浸透性を見出そうとしたのである。こうしたマルタン＝フュジェの視座は、ベル・エポック期から第二

³ Daumard, A., *La bourgeoisie parisienne de 1815 à 1848*, Paris : S.E.V.P.E.N., 1963, nouvelle éd., Paris : Albin Michel, 1996, pp. 390-394; Harrison, C. E., *The bourgeois citizen in nineteenth-century France*, Oxford : Oxford U. P., 1999, pp. 89-100. 本動向の概要については次の論文を参照。Aprile, S. et Lyon-Caen, J., « Introduction », *Revue d'histoire du XIXe siècle*, 34. [<http://rh19.revues.org/1252>] (29/3/2013 接続確認)

⁴ 通常 « sociabilité » の訳語には二宮宏之による「社会的結合関係」の語が用いられるが、本稿では社交のよこびを旨とする語の原義を尊重して「社交関係」の訳語を用いる。わが国における「社交関係」概念の受容経緯については次の論文を参照。深沢克己「友愛団・結社の編成原理と思想的系譜」深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』東京大学出版会、2010年、1-30頁。このほか、「社交関係」概念の理解に際しては次の研究を参照した。喜安朗『近代フランス民衆の「個と共同性」』平凡社、1994年。榎原茂『近代フランス農村の変貌』刀水書房、2002年。

⁵ Agulhon, M., *Pénitents et Francs-Maçons de l'ancienne Province*, Paris : Fayard, 1968, pp. 212-230; Id., *Le cercle dans la France bourgeoise : 1810-1848. Etude d'une mutation de sociabilité*, Paris : Armand Colin, 1977; Id., « La sociabilité est-elle objet d'histoire ? », dans François, E. (dir.), *Sociabilité et société bourgeoise en France, en Allemagne et en Suisse*, Paris : Éditions Recherche sur les civilisations, 1986, pp. 13-22.

⁶ 例えば Ch・シャルルによる通史では、A=J・テュデスクによって広められた「名望家」概念が再評価され、「ブルジョワジー」は地主や企業家というような限定的な意味で使用されるに止まっている。Tudesq, A.-J., *Les Grandes Notables en France (1840-1849), étude historique d'une psychologie sociale*, Paris : P. U. F., 1964; Charle, Ch., *Histoire sociale de la France au XIXe siècle*, Paris : Seuil, 1991. なお、テュデスクのいう名望家支配を伝統的な社団国家から近代的な国民国家への移行期における支配体制として理解した業績に、柴田三千雄『近代世界と民衆運動』(岩波書店、1983年)がある。

次世界大戦前にかけてのパリにおけるセルクルを対象としたA・ブラヴァールによる個別研究においても受け継がれている⁷。

以上の研究史を受けて、本稿では19世紀前半パリにおけるセルクルの事例研究を行う。主に対象とするのは、七月王政期のパリ社交界における代表的なセルクルであった「ユニオン」と「ジョッキー・クラブ」の二つである。パリのセルクルは、アギュロンの言うような「ブルジョワ的社交」が営まれた場であるのみならず、マルタン＝フュジェが検討したように、エリートを担い手とする社交界の構成要素として捉えることもできる。したがって、パリのセルクルにおける社交の実態を分析することで、セルクルを「ブルジョワ的社交関係の典型的な形態」とする従来の見方を検討しなおすことが可能だと考えられるのである。

以上の問題を論じるために、本論は次のような構成をとる。まず第1章では19世紀前半パリの上流社会における社交関係を検討し、セルクル創設の背景を探る。第2章ではパリのセルクルの活動や制度、人的構成を分析することで、パリのセルクルの構成原理を探る。第3章ではパリのセルクル創設を相対的に遅れさせたとされる要因を考察することで、パリのセルクルに固有な文化規範を見出す。

典拠としては、近年の研究文献に加えて、団体の内部文書、同時代人による著作、および、ジョッキー・クラブの来歴を記したモノグラフを参照する⁸。

1. セルクル前史——パリ上流社会の社交関係

セルクルそのものの分析に先立ち、本章ではセルクル出現に至るまでのパリ上流社会を、社交関係の変化に焦点をあわせて分析する。

革命後、パリの人口は持続的な増加傾向を示した。地方出身者や亡命貴族、復員兵や外国人などの流入によって、19世紀前半の50年間でパリの人口は倍に膨れ上がった。これを受けて、パリの都市社会にも次第に変化の波が訪れる。地域共同体からエリート層が離脱することで、エリート層の地理的・社会的流動化が進んだのである⁹。

こうしたパリ都市社会の流動状況に伴い、エリート層の社交関係も次第に変化していく。本章では「貴族的社交形態の後退」および「余暇施設の発達」という二つの変化に着目し、セルクル出現の背景を探る。

(1) 貴族的社交形態の後退

復古王政期から七月王政期にかけてのパリ上流社会における社交関係の変化を、マルタン＝フュジェは「パリ名士連の成立」という図式に集約する。

19世紀前半の上流社会に見られる宮廷と社交界との分離は、旧体制下においてすでに進行していた。宮廷がヴェルサイユに置かれたため、パリの社交界との地理的な距離が生じたの

⁷ Martin-Fugier, A., *La vie élégante, ou la formation du Tout-Paris 1815-1848*, Paris : Fayard, 1990, nouvelle éd., Paris : Perrin, 2011, chap. XI [前田祝一ほか訳『優雅な生活——「トゥ＝パリ」、パリ社交集団の成立 1815-48』新評論、2001年、第11章。] ; Bravard, A., « Le cercle aristocratique dans la France bourgeoise 1880-1939 », *Histoire, économie & société*, 30-1, 2011, pp. 85-99.

⁸ *Liste alphabétique de MM. les membres du Cercle de l'Union*, Paris, 1838; Yriarte, C., *Les cercles de Paris, 1828-1864*, Paris, 1864; Roy, J.-A., *Histoire du Jockey Club de Paris*, Paris : Marcel Rivière, 1958.

⁹ Garrioch, D., *The formation of the Parisian bourgeoisie 1690-1830*, Cambridge, Mass. : Harvard U. P., 1996.

みか、公的な政務の場と私的な社交の場の分離をも招いたのである。第一帝政期になると、ナポレオンは公私の領域の分離を解消するため、自らの宮廷にパリの社交界を取り込むことを企図した。しかし厳格で陰鬱なナポレオンの宮廷を貴族は居心地良く思わなかった。続く復古王政期、ブルボンの宮廷はチュイルリに置かれたが、宮廷の維持のみを気にかけるルイ18世とシャルル10世は社交を重視せず、そのため貴族はチュイルリよりもパレ＝ロワイヤルを好んだ。チュイルリの社交が倦怠と硬直に支配されたのに対して、パレ＝ロワイヤルではオルレアン公ルイ＝フィリップの保護の下、出生や家柄にとらわれない活発な社交が繰り広げられたのである。七月王政が始まると、ルイ＝フィリップは1831年チュイルリへと宮廷を移すが、それが社交界を伴うことはなかった。サン＝ジェルマン城外区に集住する正統王朝派の貴族たちはブルボン家に忠実であり、オルレアン家の支配するチュイルリへの出入りを拒んだのである。こうして復古王政から19世紀前半にかけて、宮廷と社交界との分離はなにかば固定化されていった。エリート層の人々を集めた社交界は宮廷から自立し、名士からなる上流社会「パリ名士連」が誕生したのである¹⁰。

上流社会が変化をむかえる中、アギュロンによって貴族的社交形態という性格を与えられたサロンは、パリ社交界においていかなる展開を見たのだろうか。

革命の混乱が収束して亡命貴族が帰国すると、早くも総裁政府期、サロンはパリにおいて息を吹き返した。第一帝政期には社交界の統合を企図するナポレオンのもとで、サロンは上流社会に統一と調和をもたらし、帝国の支配を安定させるための道具として用いられた。ところがナポレオンが失脚すると、社交界の統一は失われる。復古王政期に入ると、パリの社交界は社会的構成や政治的党派性をもとに4つの地区に分裂した。正統王朝派の牙城であった由緒正しいサン＝ジェルマン城外区、自由主義貴族と外国人の集まるサン＝トノレ城外区、厳格な法服貴族の集まる保守的なマレ、そして銀行家や実業家の集まる当世風のショ＝セダンタンである¹¹。社交界が分裂したという事実は、サロンがもはやエリート層に統一と調和をもたらす場ではなくなったことを意味する。政治的意見の相違はサロンの分裂を生み、七月王政期になると正統王朝派のサロンとオルレアニストのサロンとの間で反目が生じる¹²。確かにパリ名士連の成立後もサロンは存続し、上流社会の中で一定の存在感を示した。しかし政治化の進んだサロンからは魅力や気配りや良い雰囲気といった社交上の美德が失われ、今やサロンはエリート層に調和をもたらすという重要な役割を手放してしまった。かくして社交界が宮廷から自立するのに伴いサロンは政治的に分裂し、次節で検討する余暇施設の発達と相まって、やがては衰退へ向かっていく。エリート層の主要な社交空間は、サロンから劇場やカフェなどの余暇施設へと移動していった¹³。

(2) 余暇施設の発達

19世紀前半にパリのエリート層の社交空間として栄えたのは、セーヌ川右岸のパリ市壁跡に築かれたグラン・ブルヴァールと呼ばれる区域だった。グラン・ブルヴァールとはレピュ

¹⁰ Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 78-79, 517-518.

¹¹ *Ibid.*, pp. 131-147.

¹² Kale, S., *French Salons. High Society and Political Sociability from the Old Regime to the Revolution of 1848*, Baltimore: Johns Hopkins U. P., 2004, pp. 169-170.

¹³ Agulhon, *Le cercle dans la France bourgeoise*, *op. cit.*, p. 25.

ブリック広場からマドレーヌ寺院に至る複数の大通りをまとめて指す名称だが、人々がこの言葉から連想するのは区間の中でもとりわけ洗練された街区、すなわちイタリア座大通り周辺の一角だった。グラン・ブルヴァールという単語はエリート層の男性が参加する社交空間を表していたのである¹⁴。

グラン・ブルヴァールにおける余暇施設の中で最も華やかだったものは劇場である。建物の密集するパリにあって、比較的郊外に近く広大な用地が確保できたこの地域には、多くの劇場が集まった。かくしてショセ＝ダントン南端に接するイタリア座大通りを中心に、オペラ座やイタリア座、フランス座といった劇場が林立した。

劇場の他に、カフェもグラン・ブルヴァールで盛んな余暇施設の一つだった。店内では新聞に目を通したりビリヤードに興じたりすることもできた。復古王政期、カフェはパレ・ロワイヤルに多く店舗を構え、カフェ・ランブランなどのように自由主義者やボナパルト派の退役軍人の溜まり場となるものもあった。1830年代になると社交界の変遷に連動し、流行の中心はグラン・ブルヴァールへと移っていく。イタリア座大通りとカピュシーヌ大通りにはナポリ生まれのアイスクリーム屋ヴェローニが1798年に創業したトルトーニや、1822年から56年にかけて営業したカフェ・ド・パリ、1815年に開店したカフェ・アングレ、文学者の集うカフェ・リッシュといった有名店が軒を連ねた¹⁵。

エリート層の人気を集めた余暇施設には他に、読書室がある。これは貸本屋と新聞閲覧室を兼ねた施設で、新刊を含むフランス語および外国語の作品を豊富に取り揃えるほか、ヨーロッパ数か国とアメリカの新聞を備えていた。書籍や新聞が割高であり個人で購入することがままならなかった時代である。18世紀末以来大都市で人気を集めるようになっていた読書室は、復古王政期のパリにおいて急速に店舗数を増やした。さらには読書室の流行を受けて「文芸セルクル」と呼ばれた施設も登場する。これは読書室に休憩室が併設された施設で、休憩室では遊戯に興じることができるほか、読書の後に食事をしてくつろぐこともできた。こうした活動は後述するようなセルクルの活動とかなり似通っており、両者の類似性を指摘することができる。文学セルクルはサン＝ジェルマン城外区の貴族からは眉を顰められたが、金融業者や大卸売商、土地所有者、高級官吏、金利生活者の住む地区を中心に店舗数を拡大した¹⁶。

また、水浴もエリート層の社交を促す役割を果たした。パリでエリート層に社交の場を提供したのは、イタリア座大通りに所在した異国情緒あふれる「中国風呂」や、セーヌ川に設けられた水浴場だった。前者の入場料は20～30フランと高額で、また後者は水泳学校の名目で高額な授業料を徴収したため一般市民が気軽に入場することはできず、裕福なエリート層が主に利用することになった。有名な水浴場の例としては、ロワイヤル橋のたもとにあった

¹⁴ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 430.

¹⁵ Stendhal, *Souvenirs d'égotisme*, dans *Œuvres intimes*, t. 2, Paris : Gallimard, 1982, p. 438; Agulhon, *op. cit.*, p. 32; Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 432-433. ジュリア・クセルゴ (渡辺響子訳) 「都市の余暇の拡がりの変動」アラン・コルバン『レジャーの誕生』藤原書店、2000年、163-164頁。

¹⁶ Parent, F., « Les cabinets de lecture dans Paris : pratiques culturelles et espace social sous la Restauration », *Annales E. S. C.*, 34-5, 1979, p. 1031.

ヴィジェ浴場がサン＝ジェルマン城外区に住むエリート層の溜まり場となった¹⁷。

本章で検討した、パリ上流社会の流動化を端緒とする貴族的社交形態の衰退と、グラン・ブルヴァールを中心とした余暇施設の発達といったような都市社会の変動を受けて、いよいよパリ上流社会はセルクルの出現を見る。

2. パリにおけるセルクルの構成原理——復古王政期および七月王政期を対象に

本章ではパリに創設された個別具体的なセルクルに焦点を当てて、フランシュ＝コンテ地域圏を中心とする諸都市におけるアソシアシオンを対象としたハリソンの研究と比較することで、パリにおけるセルクルの構成原理を検討する。

パリで最初に登場したセルクルは、1819 年創設のグラモン街セルクルである。1824 年にはフランス・セルクルも創設されたが、1826 年ヴィレル内閣は両者を禁止する。1828 年にマルティニャック内閣が禁止を撤回すると、同年、ロンドンでクラブ文化の影響を受けたギッシュ公らがユニオンを創設する。パリでは復古王政末期までに少なくとも五つのセルクルが創設されるが、中でもユニオンはとりわけ高級なセルクルとして名を馳せた。七月王政期になるとパリのセルクルの数はおよそ 15 にまで増加する。中でも 1834 年、ヘンリ・シーモア卿を中心とする競走馬の飼育に興味を持つメンバーが集まって創設したジョッキー・クラブは、当世風のセルクルとして社交界の人気を集めた。以上が 19 世紀前半パリにおけるセルクルの展開のあらましが、これを踏まえて以下の各節ではセルクルの構成原理を項目別に検討する。

(1) 活動と制度

最初に、セルクルにおける活動の内容を検討する。セルクルの活動が盛んになるのは午後と夜だった。社交界人たちは一般に、午前 10 時に身だしなみと昼食を済ませた後、正午過ぎにブローニュの森へ散歩に行き、カフェ・ド・パリやトルトーニで夕食を取らない場合は午後 5 時からジョッキー・クラブへ向かった。セルクルが最も賑やかになる時間帯は午後 7 時前後だったという。外交官たちも公的な会食の予定がない日はユニオンの夕食会に参加した。ワインを差し引いた夕食の代金は 6 フランで、いつも 40 人ほどの会員がテーブルを囲んだ。立派なワイン蔵を備えていたユニオンでは、よそでは手に入らないような高級ワインが供されたという。そのほかに砂糖水は無料で好きなだけ飲み、紅茶は一杯 50 サンチームで楽しむことができた。一方のジョッキー・クラブでも、サロンやレストランよりも上等の食事が供された。食事は健康的で、かつ値段も安かった。社交界人たちにとって、セルクルは自宅やカフェと並ぶ夕食の場だったのである。夕食後は社交界や劇場に繰り出す者がいる一方、セルクルに残って新聞を読んだり煙草を吸ったりする者もいた。セルクルの読書室には新聞が置かれ、例えばグラモン街セルクルでは 1832 年、フランスや外国で発行された 72 種類の新聞を読むことができた。また遊戯室では、賭けトランプやビリヤードに興じることもできた。ユニオンの遊戯室には 4、5 台のテーブルが置かれ、そこではホイストやピケットが人気を集めたという。このように、セルクルの内部では社交のよろこびを核としながら、きわめて多

¹⁷ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 434. ジュリア・クセルゴン (鹿島茂訳) 『自由・平等・清潔』河出書房新社、1992 年、186-187 頁。

種多様な活動が繰り広げられたのであった¹⁸。

続いてセルクルの制度を項目ごとに検討する。まずは各セルクルの規模を見てみよう。パリで最初に創設されたセルクル、グラモン街セルクルは定員 500 名であったが、具体的な会員数のデータは残っていない。一方、定員を 300 名とするユニオンは、1838 年の時点で永久会員 246 名、名誉会員 159 名、一時会員 18 名を数えた。ジョッキー・クラブの会員数は 34 年のセルクル創設当初には 89 名だったが、36 年には 206 名、40 年には 260 名と増加を辿った。ただし、会員数は単調増加を見たわけではなく、34～49 年の間に死亡 30 名、退会 60 名、除名 20 名を数えた。後にイタリア王国初代首相となるカヴールの証言によれば、1842 年ジョッキー・クラブの会員数は 250 名であったが、そのうち毎日顔を見せるのは 100 名ほどであったという。なお、これら会員の人的構成に関しては次節で検討する¹⁹。

セルクルは会員に対して入会金と年会費を要求した。金額は団体ごとに異なり、グラモン街セルクルは年会費 150 フラン、ユニオンは入会金と年会費ともに 250 フランずつだった。当時の石工の日当が 3 フラン 25～50 サンチームと言われることから、費用の面におけるセルクルの敷居の高さを見て取ることができるだろう。なおユニオンはパリの中でもひとときわ高級なセルクルといわれたが、会費という点では他のセルクルに比べて高額というわけではなかったとされる。実際、ジョッキー・クラブは入会金 150 フラン、年会費 300 フランと定められたが、これはユニオンと比べても遜色ない金額である²⁰。

さて、ここまででセルクルの規模や会費の額を検討したが、これらの要素だけを根拠に個々のセルクルの性格を浮き彫りにすることは難しい。そこで、入会条件の厳しさという観点からパリにおけるセルクルの特徴を見出すことはできないだろうか。

通常、セルクルへ入会するためには会員による紹介と委員会による投票という二重の段階を経る必要があった。例えばグラモン街セルクルに入会するには会員 1 名の紹介が必要で、投票に際して 12 票のうち反対が 3 票以上になると入会は否決された。これに対して、ユニオンへの入会条件はとりわけ厳しかった。会員 2 名の紹介を必要とし、投票に際して 12 名のうち 1 票でも反対があれば入会を認められなかったのである。なおユニオンの特徴として、宮廷の側にいるような外国人の大使や大臣に関しては投票なしで入会できるという特例が設けられていた点が挙げられる。一方、ジョッキー・クラブでは会員 3 名による紹介を必要としたが、評決には最低 6 名の会員の出席が必要で、うち 1 名でも反対の黒球を入れた場合入会は拒否された。このようにセルクルごとに水準が異なるとはいえ、いずれのセルクルも厳しい入会条件を課した点に変わりはない。1835 年ジョッキー・クラブに入会した貴族院議員アルトン＝シェの証言によれば、ジョッキー・クラブがつくられた目的は「カフェ・ド・パリで集まる食事や賭けの集いに入ってくるような悪い仲間に対して防壁を築く」ことであったという。投票の制度は、ユニオンなどのセルクルを牛耳っていた正統王朝派たちによって、自分たちに不都合な者を斥ける手段として使用された²¹。

¹⁸ Yriarte, *op. cit.*, pp. 35-38, 43-45; Roy, *op. cit.*, p. 50; Daumard, *op. cit.*, p. 391, n. 4; Kale, *op. cit.*, p. 193.

¹⁹ *Liste alphabétique...*, *op. cit.*, pp. 67, 77; Roy, *op. cit.*, p. 141; Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 442, 447.

²⁰ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 447; Roy, *op. cit.*, p. 37; Yriarte, *op. cit.*, pp. 46, 47. M・ナド (喜安朗訳) 『ある出稼石工の回想』岩波書店、1997 年、85 頁。

²¹ *Liste alphabétique...*, *op. cit.*, p. 79; Yriarte, *op. cit.*, pp. 29, 46-47; Roy, *op. cit.*, pp. 29-39, 37; Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 447.

なお、フロベール『紋切型辞典』における「CERCLE」の項目に「かならずなにかのセルクルに所属すべきである²²」と記されていることから分かるように、セルクルへ受け入れられるということはエリート層にとってのステータスシンボルと捉えられていた。そのことはパリだけでなく地方においても変わりはないが、入会条件の厳しさはパリと地方とでは異同が見られる。ハリソンの研究によれば、地方でもパリと同じく入会に際して会員の推薦と投票が必要とされたが、受け入れの条件は緩く、わずか半数の賛成票で入会が認められるセルクルもあった。パリと違って投票が重視されることは少なく、1836年から1870年代にかけてミュルーズのセルクルはほぼ全ての入会希望者を全会一致で受け入れた²³。以上の比較から、セルクルへの入会条件の厳しさはパリにおいてとりわけ強かったことが見て取れる。この問題に関しては、次節でさらに考察を深めたいと考える。

(2) 会員の社会的構成と政治的党派性

本節で検討するのはセルクル会員の社会的構成と政治的党派性である。前節ではセルクルへの入会条件の厳しさを制度面から検討したが、本節では、制度の運用の結果としていかなる社会的構成・政治的党派性の会員が選ばれるに至ったかを検討したい。

最初に会員の社会的構成を検討するが、これはセルクルによる偏差が大きい分野である。例えばグラモン街セルクルはブルジョワジーが最も興味を持ったセルクルとされ、会員は上院議員、下院議員、将官、大商人、銀行家といった層から構成されていた²⁴。一方、パリの中でもとりわけエリート主義的とされたユニオンは、主として貴族と外交官の会員を集めた。創設メンバーには「イギリスかぶれ」の導入者とされたギッシュ公、「伝説のライオン」として名を馳せたオルセー伯をはじめとする貴族たちに加え、多数の外交官が加わった。外交官の資格をもって入会した人物には、タレランやティエール、ギゾ、オディロン・バロなどがある。この時期の外交官には社交上の優雅さが求められたため、多くは貴族により構成されていた。そのためユニオンは外国人の会員を多く集め、1830年には会員数300名のうち半数は外国人であった。会員には亡命中のポーランド人のほか、ロシアやスペインの外交官などが含まれていた。ユニオンに参加した外国人の中ではロシア人の割合が大きく、またクラブ文化発祥の地であるイギリス人も多かった。対するフランス人の会員は、近衛隊の退役士官、前の宮廷の高官および反体制的な貴族によって構成された。なおユニオンへの入会を認められなかったのは、例えばショセ・ダンタンに住む実業家たちであった。例外的にユニオンの会員であった銀行家のジャム・ド・ロチルドは、外交官であったがために入会を許されたのである。そのほか、わずかではあったが入会を認められる芸術家も存在した。それは彼らが文芸サロンやアカデミーのように、上流社会の中で権威を認められた組織から受け入れられていたためであった。ユゴやミュッセ、ドラクロワらはその恩恵にあずかり、入会を許された。かくしてユニオンは、パリにおけるセルクルの中でもとりわけ高級で敷居の高い社会的構成を実現するのである²⁵。

これに対してジョッキークラブは、貴族や外交官にとどまらない幅広い社会層を受け入

²² Flaubert, G., *Dictionnaire des idées reçues*, dans *Œuvres*, t. 2, Paris : Gallimard, 1952, p. 1003.

²³ Harrison, *op. cit.*, pp. 87, 92.

²⁴ Daumard, *op. cit.*, p. 392.

²⁵ Yriarte, *op. cit.*, pp. 4-8, 10, 17, 21, 28-29, 41.

れた。創設メンバーの中には貴族のほかには銀行家、両替商、外国人、さらには社交界とはまったく関係のない馬の専門家までいた。このためイリアルトはユニオンを「黄金の障壁」になぞらえたのに対し、ジョッキー・クラブを「階級同士を結ぶ鎖」と表現する。カヴールの証言によると、ジョッキー・クラブに毎日顔を見せる会員の特徴としては、賭博師や競馬愛好家、パーティの愛好者、また「いたずら者」といった層が列挙されている。「いたずら者」とは文学者のような人物を指し、例えばオーギュスト・ロミュは「社交界人ではなく才人として」入会を許された唯一の会員であった。一方で、『パリの秘密』などの作品で知られるウジェーヌ・シューは創設以来の会員であるが、作家としてではなくダンディ、馬の愛好家として入会したのだった²⁶。

こうしたパリのセルクルに見られる会員の社会的地位の高さは、地方のアソシアシオンと比較すると際立っている。再びハリソンの研究を引き合いに出すと、ミュルーズのアソシアシオンでは織物の実業家や技師、化学者が主要な地位を占め、ブザンソンの学術協会は弁護士や教授が取り仕切る傾向があった。ロンルソニエではワイン商のような他と比べて社会的地位の低い職種の会員が多数を占めた²⁷。ハリソンの検討した地方都市の事例に、貴族をも包摂する例を見ることはできない。こうした地方の事例からも、会員の社会的地位の高さというパリのセルクルの特殊性が浮き彫りになるのである。

続いて、会員の政治的党派性を検討する。セルクル内の会話において政治に関する話題はタブーであったとはいえ、団体による政治的党派性の違いは確かに存在した。ユニオンは1830年ごろの正統王朝派の砦と呼ばれ、由緒正しい正統王朝派や家柄のよいオルレアニストを受け入れた。シャルル・ド・レミュザやブロイやノアイユなどのような自由主義貴族の会員もいたことは確かだが、その数はごくわずかであった。それに対して、馬という流行を中心に据える当世風のセルクルとして同時期に栄えたジョッキー・クラブは、保守的とされたユニオンに比べて自由主義的な気風が強かった。政治的立場や経歴を理由に入会を断られることはなかったために、正統王朝派やボナパルティスト、オルレアニストなど多様な政治的党派を受け入れることができたのである。ルイ・ナポレオンの異父弟で第二帝政期の有力な政治家となるシャルル・ド・モルニはボナパルティストの傾向があったが、彼も1838年ジョッキー・クラブに入会した²⁸。こうした政治的党派性の偏りは、少なからず会員の社会的構成と連動していると考えられる。会員に共和派の存在が見られないことから、それを裏づけることができる。

以上、本章の分析を通じて明らかになったパリのセルクルの特徴は二点ある。一つは入会条件の厳しさであり、もう一つは会員の社会的地位の高さである。パリのセルクルは貴族とブルジョワジーの別を問わず、広くエリート層の会員を集めたのであった。このような特色ある会員構成と相まって、我々はパリのセルクルに固有の性格を見出すことができるだろう。次章ではそうした性格の具体的内容を検討する。

²⁶ Yriarte, *op. cit.*, p. 61; Roy, *op. cit.*, pp. 16-22, 52; Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 442-443.

²⁷ Harrison, C. E., 'Unsociable Frenchmen', *Tocqueville Review*, 17, 1996, pp. 40-41.

²⁸ Yriarte, *op. cit.*, pp. 7, 28-29, 64; Roy, *op. cit.*, p. 51; Martin-Fugier, *op. cit.*, pp. 444, 448-449.

3. パリにおけるセルクルの固有な性格——貴族とブルジョワジーの融和

パリはセルクルの登場が比較的遅かった地域とされる。この理由をアギュロンは、政治的要因と文化的要因の二点から説明する。すなわち一つは政府の反結社的な姿勢であり、もう一つは貴族的社交形態たるサロンの存続である²⁹。後の考察で示されるように、両者の間には少なからず関連性が存在したと考えられる。本章ではこれらの要因について考察を深めることで、パリのセルクルに特有な性格を見出すことをめざす。

(1) 政府による法的規制

本節ではまず、政府の定めた法制度における結社規定に着目する。革命後のフランス政府は、新奇な社交組織であるセルクルに対していかなる反応を示したのだろうか。

1901年7月1日の法律によって、フランス法制史において初めてアソシアシオンの権利が認められるまで、19世紀を通じてフランス政府はアソシアシオンの権利に敵対的であった。後述するようにセルクルの創設もこうした政府の態度から少なからず影響を受けているが、この姿勢は起源をたどればフランス革命にまでさかのぼる。1791年6月14～17日に国民議会の制定したル・シャプリエ法は、革命期のアソシアシオンに対する政府の姿勢を明確に打ち出した法律としてしばしば引き合いに出される。本立法は「封建制」の廃止によって提示された近代社会の理念を具体的に制度化したものの一つだが、その骨子を端的に示す条文が、第一条「同じ身分・職業の市民たちのすべての種類の同業組合の廃止は、フランス憲法の根本的基礎の一つであるから、それを事実上再建することは、いかなる口実・形式のもとであれ、禁止される」だとされる³⁰。条文において「同業組合」と訳されているのが旧体制における社団を原義とする用語「corporation」であることから読み取れるように、ル・シャプリエ法の秩序原理とは、個人と一般意思の尊重という理念から、社団、すなわち特殊利害の担い手としての中間団体を禁止することであった³¹。そのことを端的に示すのが、ル・シャプリエによる次の発言である。「もはや、国家の中に同業組合はないのである。各人の個人的な利益と一般的な利益の外にはもはや何もない。市民に中間的利益を教え込んで、同業組合の精神によって市民を公の事物から分かちつことは誰にも許されない³²」。我々はここに、フランス革命期の支配層が抱いた個人主義の理念を見る。

では、このような理念は第一帝政の支配層にまで受け継がれたのだろうか。第一帝政期に制定されたアソシアシオンを対象とする法律には、1810年に公布された刑法典の第291条がある。「宗教、文芸、政治その他の目的に携わるため毎日または定められた日に集合することを目的とした20名以上のアソシアシオンは、政府の承認をもってのみ、あるいは公権力が協会に対し意のままに課する条件のもとでのみ結成しうる³³」ことを定めたこの条文は1901年まで効力を持ち続け、19世紀におけるアソシアシオンのあり方を決定づけた³⁴。この法令の制定動機は、政治結社の規制および自由一般に対する不寛容の二点とされる³⁵。刑法第291条

²⁹ Agulhon, *op. cit.*, p. 27.

³⁰ 河野健二編『資料フランス革命』岩波書店、1989年、256頁。

³¹ Harrison, *The bourgeois citizen in nineteenth-century France*, *op. cit.*, p. 26.

³² 河野前掲書、258頁。

³³ Rondonneau, L., *Corps de droit Français*, Paris : Durante éditeur, 1997, p. 466.

³⁴ Agulhon, *op. cit.*, p. 18.

³⁵ Morange, J., *La liberté d'association en droit public français*, Paris : P. U. F., 1977, p. 32.

は革命後の「秩序の敵」としてのアソシアシオンを禁止したのであり、ゆえに目的を問わず公共の秩序を乱す恐れのある全てのアソシアシオンを標的にしたのであった。20名以上という形で線引きがなされたのも、家族や友人、近隣間の社交関係と区別することを目的とするものだった。20名未満から成るとされた私的な社交関係は、公共の秩序を乱す恐れがあるとは考えられなかったのである³⁶。したがって、ここに革命期の個人主義的言説の痕跡を見ることは困難である。アソシアシオンの統制は個人の擁護ではなく、政体の維持にかかわる問題として行われたものであった。実際、第一帝政の支配層はアソシアシオンの有用性を認めており、法の運用に際してはアソシアシオンの種類・性質に応じて個別的に柔軟な対応がなされた³⁷。

このように一部のアソシアシオンを支持し、他方でその活動を厳しく監視するという第一帝政期における支配層の実践は、19世紀を通してフランス政府の統治原理となる。七月王政期に制定された1834年4月10日の法律、通称「反結社法」は、刑法291条を厳罰化するものだった。会員数が20名未満であっても、また定期的な集会を開かなくとも、あらゆるアソシアシオンに対して刑法第291条が適用されるようになったのである。この反結社法の統治原理は、政治結社の制限と自由への不寛容という刑法第291条の統治原理を受け継ぐものであった。この時期に適用範囲の拡大と厳罰化が行われたのは、反政府的な政治結社を意識してのことだった。反結社法が公布された当時、パリでは4千人もの共和派が政治結社「人權協会」に参加し、それは300の支部に分割されていたのである。彼らは刑法第291条の適用を免れるために支部ごとの会員数を20名以下に絞り、決められた日に集まることをしなかった。反結社法はこうした政治結社の動きに対応した措置だったのである³⁸。

以上の法制史分析から支配層のアソシアシオンに対する基本的な姿勢が確認できたが、ここから政治色を帯びない純粋な社交に対する政府の敵意を見出すことは困難であろう。にもかかわらず、復古王政ないし七月王政の政府はセルクルへの規制をおこたることはなく、そのためセルクル創設に際してはアソシアシオンに敵対的な政府の目を意識しないわけにはいかなかった。1826年にグラモン街セルクルとフランス・セルクルがヴィレル内閣によって解散を命じられた事例は第2章で確認した通りである。表立って反政府的な姿勢を打ち出したわけでもない純粋な社交組織であったにもかかわらず、なぜ政府はセルクルを敵視したのだろうか。

この疑問を解くには、セルクルの活動内容を検討する必要があるだろう。セルクルの活動に見られる文化規範が政府の不信を招いたことは確かである。仲間うちだけで集まっていかがわしい娯楽を行うことはセルクルのもつ大きな魅力だったが、公権力がセルクルに対して抱いた一番の不満は、まさにこうした賭け金の高いギャンブルだった。ゆえに政府がセルクルの監視を怠ることはなかったのである³⁹。

以上の分析をまとめると、セルクルの規制に対する政府の態度を問題にする際、重要なのは法の条文よりむしろ法の運用であったといえる。アソシアシオンに敵対的な政府の姿勢は、

³⁶ Agulhon, *op. cit.*, p. 22. 高村学人『アソシアシオンへの自由——共和国の論理』勁草書房、2007年、90頁。

³⁷ Harrison, *op. cit.*, p. 27. 高村前掲書、89、92頁。

³⁸ Morange, *op. cit.*, pp. 36-37; Harrison, *op. cit.*, p. 53, n. 4.

³⁹ Harrison, *op. cit.*, p. 94.

パリでは特に復古王政期におけるセルクル創設に際して障害になったものと考えられる。とりわけ復古王政期、1820年のベリー公暗殺後に政府が取った抑圧的な方針は、ブルジョワジーたちが社交を営む際の懸念事項になったとされるためである⁴⁰。

トランプ賭博やビリヤード、新聞といったセルクルの活動は、従来のフランス社会にとって異質な文化規範に基づくものであった。政府が危惧し、敵意を持ったのは、まさにこうしたセルクルの文化的要素だったのである。1828年ユニオンの創設許可を出すに際し、国王シャルル10世は次のように述べる。「わが友よ、もはや余に貴君らを拒むことはできない。だがここに余が宣言するのは、フランス社会の死に他ならない」。アギュロンによれば、市民的・平等主義的なイギリス風の社交形態であるセルクルの導入によって死を迎える「フランス社会」とは、すなわち貴族的・身分制的な「旧体制的フランス」のことである⁴¹。それでは政府の懸念した新しい文化規範とは何だったのだろうか。前章までの分析を踏まえて、次節ではその具体的内容について検討する。

(2) 新たな文化規範の創造

はじめに触れたように、アギュロンはセルクルを「19世紀前半フランスにおけるブルジョワ的社交関係の典型的な形態」と定義して、「貴族的社交形態」であるサロンに対比されるものとして定式化した。ここでアギュロンは、ブルジョワジーを上位の貴族とも下位の民衆とも区別されるという意味で「中流階級」と定義しているが、パリにおけるセルクルの会員に上位の階級たる貴族が多く含まれていたことは、すでに前章において検証した通りである。この事実から、パリのセルクルはブルジョワ的社交組織という枠組みにとらわれるのではなく、貴族とブルジョワジーを包摂する固有な文脈のもとで捉えることができるのではないかという仮説を立てることができるだろう。本節では、この仮説を文化規範の面から裏付ける。

まずはセルクルが他の社交形態と比較して文化的に異なると考えられた点を確認しよう。セルクルにおける会話はサロンほど洗練されたものではなかったとはいえ、サロンよりも自発的だった。話題を提供し会話の舵を取る女主人がいなかったためである。一方でセルクルはカフェほど過激でもないし、政治的な会話も控えられた。会員同士がお互いを尊重し合うことで、望まれない乱雑さと内部分裂を防いだためである。このように会員が社交上の規則を互いに了解し合うことは、セルクルの成功をもたらす大きな要因であった。政治的な話題が禁止されたのも、陰謀や暴力や煽動を連想させる「クラブ精神」の拒否、および協調と調和を旨とする「アンシヤシオン精神」の採用を意味するものであった⁴²。

こうした調和の思想が、ブルジョワジーが貴族とは異なる中流階級として凝集力を高めるのに寄与したと考えるのは妥当だろうか。少なくともパリにおいて、そう考えるのは困難である。そのことは、パリにおけるセルクルの文化規範を仔細に分析すれば明白である。セルクルはパリの余暇施設が全体として構成する一つの構造体、すなわちグラン・ブルヴァールを舞台としたパリ名士連を構成する要素の一つであった。セルクルを含むこの構成体は、宮廷やサロンを舞台とした貴族を担い手とする社交のあり方とは異質な新たな文化規範を育てていく。グラン・ブルヴァールと文学あるいはジャーナリズムは、社交界の若者にとって共

⁴⁰ Garrioch, *op. cit.*, p. 266.

⁴¹ Agulhon, *op. cit.*, p. 29.

⁴² Harrison, *op. cit.*, pp. 96-98.

通の空間を表していた。このパリ名士連という空間は、社会的出自は異なるものの同じ生活様式を取り入れた男性たちを互いに接近させていたのである⁴³。

パリ名士連における文化規範は確かに貴族的なものとは言えないが、かといってブルジョワ的なものともほど遠かった。確かに、垂直的な社交形態を避けて成員間の平等を志向した点や、両性の混交からなる社交を不品行として男性のみによって構成された点はブルジョワジーの文化規範に合致する⁴⁴。また亡命貴族の帰国によってもたらされた「イギリスかぶれ」も新奇な文化規範であり、保守的な貴族はこれに眉をひそめた。セルクルを生む要因となったクラブ文化はその最たるもので、ユニオン創設に最も貢献したギッシュ公とオルセー伯は「イギリスかぶれの最初の導入者」といわれた⁴⁵。また、新聞はブルジョワジーのアトリビュートとされ、情報伝達の手段としてサロンの会話を代替するものだった⁴⁶。煙草や馬もアングロサクソンの習慣を取り入れたものであり、フランス文化を脅かす存在として認識された。貴族文化の保護を主張する人びとは喫煙を退廃の象徴だと主張した。セルクルの室内で会員が煙草をくゆらせながら談笑するとき「貴族制」は「民主制」に取って代わられる。うわさ話は新聞によって、社交は友情によって、サロンはビリヤード・トランプ・スポーツによって浸食されたという次第である⁴⁷。

一方で、パリ名士連における文化規範には貴族的な側面も多分に含まれていた。その一例として、グラン・ブルヴァールを舞台として1820年代から30年代にかけて流行した「ダンディズム」を挙げることができよう。洒脱かつ奔放な生活で名を馳せたイギリス人のブランメルに端を発するダンディズムは、イギリスかぶれの風潮と相まって、パリのエリート層の若い男性たちを虜にしていった。ダンディたちは金銭をまたたく間に蕩尽することで、虚栄の優雅さを周囲に誇示することを至高の悦びとした。ダンディズムの退廃的な性格がしばしば貴族を含むエリート層の輦轡を買ったことは事実だが、マルタン＝フージェによれば、こうした衝動的な浪費は旧体制の貴族に帰せられる性格でもある⁴⁸。ダンディズムはこの時代のエリート層に特有の文化規範であったのだ。七月王政期には、流行の最先端を行って皆の注目を集めるような若者を表す「ライオン」という言葉も流行した。「観光客が必ず訪れるロンドン塔のライオン⁴⁹」を語源とするこの言葉は「並外れたダンディ」と同義だとされる⁵⁰。ライオンになることを望む者は突飛な身なりで目立とうとし、社交界の好奇心を集めようと努めた⁵¹。こうした浪費と虚栄への志向は、ダンディズム特有の価値観であった。

パリ名士連の文化規範を貴族ないしブルジョワのいずれか一方だけに帰属させることは困難である。例えば煙草を吸う行為は貴族からは退廃的だとして非難される一方で、ブルジョワジーの禁欲的な規範とは相反するダンディズムの一環として認識された。パリ名士連の社

⁴³ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 490.

⁴⁴ Harrison, *op. cit.*, p. 95.

⁴⁵ Yriarte, *op. cit.*, p. 16.

⁴⁶ Tudesq, A.-J., « Le journalisme lieu et lien de la société bourgeoise en France dans la première moitié du XIXe siècle », dans François, E. (dir.), *Sociabilité et société bourgeoise en France, en Allemagne et en Suisse*, p. 262.

⁴⁷ Kale, *op. cit.*, p. 199.

⁴⁸ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 468-469.

⁴⁹ « lion », dans *Dictionnaire Littré en ligne* [<http://littré.reverso.net/dictionnaire-francais/definition/lion>]
(17/12/2012 接続確認)

⁵⁰ Roy, *op. cit.*, p. 50.

⁵¹ Martin-Fugier, *op. cit.*, p. 471.

交関係における文化規範は、貴族とブルジョワジーの二項対立によって説明されるものではなく、むしろ両者を結びつけてエリート層に調和をもたらすものであったと理解できる。シャルル10世が「フランス社会の死」として嘆いたセルクルの創設は、必ずしもブルジョワ的文化規範の勝利を意味するものではない。セルクルを「ブルジョワ的社交形態の典型的な形態」とする従来の見方は再検討の余地があり、パリ名士連の一部としてのセルクルは貴族とブルジョワジーの融和の場であったと考えられるのである。

結論

本稿においてセルクルを分析する際の典拠としては刊行された文献のみに頼らざるを得ず、したがって分析対象を主要な一部のセルクルに絞らざるを得なかった。このような限界を認識した上で、以下に本稿の結論を提示する。

本論において明らかにした内容を要約すると、まず第1章では、貴族的社交形態の後退や余暇施設の発達といったパリ都市社会の変化がセルクルを生み出す土壌となったことを確認した。続いて第2章ではセルクルの活動・制度と人的構成を分析することで、パリのセルクルにおける入会条件の厳しさと貴族的要素の濃さを明らかにした。最後に第3章では、貴族とブルジョワジーのいずれか一方に帰することのできないような、パリのセルクルに固有な文化規範の存在を明らかにした。

以上の分析から、19世紀前半パリにおけるセルクルの展開は、貴族とブルジョワジーの二項対立とは位相を異にする、パリ上流社会に固有な文化力学の帰結として捉えなおすことができるものと結論づける。少なくともパリのセルクルに関してみたととき「ブルジョワ的」という表現には検討の余地があり、パリのセルクルの性格を判断する際には「ブルジョワ階級」という分析枠組みよりも「エリート」の分析枠組みを使用した方がよりよい理解が可能になると考えられるのである。

この結論から、我々は市民社会の新たな表情を見出すことができる。市民社会を構成するアソシエーションの担い手はブルジョワジーに限定されず、それゆえ、市民社会は貴族を包摂するエリート層を主体として発展した可能性が示唆されるのである。こうした展望が開かれるとき、パリという一地域のみを対象とした個別研究に過ぎない本稿であっても、近代フランスにおける市民社会の実態を捉えるための手がかりを提供することになるだろう。